

『俳諧玉言集』冬之部下二 翻刻

杉田 美登

七十九丁表

旅に病んで夢はかれ野をかけめくる かれ尾花集 句撰

泊船集 あらまき 古せん 三歌仙

神前の茶店にて（熱田）

しのぶさへ枯て餅かふやとりかな 野さらし 笈日記

句集 句撰記

霜の後葎をとひて

花みな枯れて哀をこぼす草の種 句集貞享二年

泊船 句撰

泊船 ある人のもとにて

一葉に麦蒔てとして第三迄あり 後拾遺に夏の部

句集貞享四年 泊船 句撰

麦はへてよきかくれ家や畠むら 後拾遺に夏の部

句集 貞享四年 泊船 句撰

熱田梅人亭塵裏の閑を思ひよせて

水僊や白き障子のともうつり 句集元禄四年 一葉

ウラ六句目迄 泊船 句撰 あらまき

笈日記の三年は非なるべし。四年なるべし。

○笈日記に、元禄三年の冬神無月七日ばかりならん熱田の梅人亭に宿して、塵裏の閑を思ひよせられけむ、九衢斎といへる名を残して、とあり。

初三河にて白雪といへるものゝ子二人に桃先桃後と名を付あたへて

その句ひ桃より白し水仙花 附合集 句集元禄四年

泊船

七十九裏

三秋を経て草庵に帰れば旧友門人日々にむらがり来りて、いかにと問へばこたへ侍る。

ともかくもならでや雪の枯れ尾花 古撰 泊船

続猿蓑

元禄辛酉之初冬九日素堂菊園之遊、重陽の宴を神無月のけふに儲侍る事はその頃花いまだめくみもやらす。

菊花開く時則重陽といへる心により、かつは展重陽のためしなきにしもあらねば、猶秋菊を詠じて人々をすゝめられける事になりぬ。

菊の香や庭にきれたる沓の底 許六消息 句集元禄六年

泊船 句撰

苜あとや物にまきれてそばの茎 句集に秋 拾遺集に

冬季よひ そば苜 冬也

八十丁表

元禄六年冬はせを庵にて即興

寒菊や粉糠のかゝる白のはた

初便 句集 附合集

くさくさ

泊船 句撰 炭俵

うしろ向く大黒の讚 一本に 出羽山形三面大黒讚

忘るゝな神の頭巾のしめくゝり

後拾遺

貞徳翁讚

をさな名やしらぬ翁のまる頭巾

句集追加 句撰

五つ六つ茶の子に並ぶるろり哉

句集追加 句撰

乾鮭や何かし殿は毛唐人 (存疑) もとの水

冬かれの磯に今朝見るとさか哉 (誤伝) 炭俵 句集

元禄六年 句撰 泊船 あらまき

とさか後拾遺に鶏冠海苔なるべし

杖白炭や彼浦島が老の筥 拾遺

八十丁裏

煤 掃

小文庫に此句ニテ山店 史邦・嵐竹養話の歌仙あり。

煤掃き之説 文章之部に 出

すゝはきや暮行宿の高軒 句集貞享二年 泊船

煤掃きは己が棚つる大工かな

炭俵にすゝはきと題あり。句集元禄六年 泊船集 あら

まき

旅行

煤はきは杉の木の間のあらしかな (存疑) 句集元禄四

年 泊船

掃きまつりけふも焼場のけふりかな

行脚の五器一具難波に残し置たるを、年経て路通

が送りけるを見て

後拾遺に、△此印より下の文、置けるを路通法師七年の

後、湖南の旅亭に送りけるを見てとあり。

これや世の煤にそまらぬ古合子 句集元禄三 泊船

句撰 あらまき

合子 平家物語に、田舎からしのきわめて大きにくほ

かりけるに□うつてう□そひたると云也。

旅寝して見しやうき世の煤払 曠野 笈の小文 句集

師走 節季候 年之市 餅搗 泊船集

師走

節季候 年之市 餅搗

年之市 餅搗

八十一丁之表

月白き師走は子路が寝覚かな 句集貞享二年 泊船 句撰

何にこの師走の市に行くからす 万菊へ消息 句集元禄

二年 泊船

果の朔日の朝から

・此哉ノ義にならんなるべし。などとあるべきを哉といへるあり。変格此句はたよりならんとあるべきなり。

粟津にて

稻妻や海の表をひらめかす 句集元禄四

本間主馬宅にて 続猿蓑に前書あり。文章之部に出。

かくれけり師走の海のかひつぶり 句集元禄二 泊船

句撰 あらまき

十二月九日一井亭興行

たび寝よし宿は師走の夕月夜

三歌仙に一折

節季候の来れば風雅も師走哉 句集元禄四年 泊船集

句撰拾遺

素堂亭年忘

節季候を雀のわらふ出立かな 句集元禄四 泊船 句撰

一休が土器買ん年の市 (存疑) もとの水

年の市線香買に出はやな 句集貞享四年 泊船

一に暮・続虚栗に市 ●願ふはや 詠のな

有明も三十日にちかし餅の音 句集元禄六年 泊船句撰

八十二丁裏

年忘 年暮 行年

洛上御霊别当素桃丸興行

半日は神を友にやとしわすれ 付合集 句集元禄三年

此忘ながるゝ年の淀ならん (誤伝) 句集延宝・天和

泊船 句撰

まだ埋火のきへやらず臘月末京都を立出て乙州が新宅に春を待ちて、

人に家を買せて我は年忘 曲水へ消息 泊船 句撰

猿蓑 句集元禄二年 あらまき

魚鳥のこころはしらずとしわすれ 句集元禄四年

泊船集 句撰拾遺

年わすれ三人寄て喧嘩かな (存疑) もとの水

わすれ草菜飯に摘む年の暮 句集延宝天和 句撰

あらまき

年暮ぬ笠着て草鞋はきながら 野ざらし 句集 句撰

あらまき

くれくれて餅を木魂の侘寝哉 句集貞享元年

八十二丁表

自得箴

めでたき人の数にもいらん老の暮 文章の部 泊船集

句撰 句集貞享二年 あらまき

月雪とのさばりけらしとの暮

句集貞享三年 泊船集

続 虚 栗

初 便 拾 遺

句集元禄六

和角蓼蚩句

盗人にあふた夜もあり年の暮

猿蓑 句集 元禄元年

泊船 句撰 あらまき

せつかれて年わすれする機嫌かな

句集元禄五年

泊船 句撰

蛤のいける甲斐あるとしのくれ

泊船 句撰

イにも

句集元禄五年

分別の底たたきけりとしの暮

句集元禄六年 泊船

句撰

川海ある所にたはめたる柴画に

須磨の浦の年とりものや柴一把 句集追加

みなをがめ二見の七五三のとしの暮

附合集

旧里や臍の緒に泣年の暮

曠野 笈の小文 句撰

千鳥掛に前事あり。文章の部に出。

成りにけりけりまでとしのくれ 拾遺

うかうかと年よる人やふる暦 (存疑) もとの水

画賛

行年や汝が親の小松うり (存疑) もとの水

行年や薬に見たき梅の花 (存疑) もとの水

○名所 並雑句之部

△此句は松島行脚の前年、元禄元年の吟也と云。句撰には初五文字を朝寒として秋之部に出せり。

朝よさは<sup>ママ</sup>たれ松島を<sup>ママ</sup>・一にそ<sup>ママ</sup> 片こころ

歩行ならば杖つき坂を落馬かな 笈の小文 文章之部

越後新潟にて

海に降る雨やこひしき憂身宿 拾遺に出

一葉に真偽不定

名所八体 松尾宗房

八十三丁の表

星合の中や絶なん龍田川 (存疑)

秋や須磨すまや秋しる麦日和 (存疑)

貝寄る風の手しなや若の浦 (存疑)

汗水や吉野とまりの笈山伏 (存疑)

松島や雪の白地の衣くはり (存疑)

姥石にかはしたる雉子哉 (存疑)

八朔や天橋立たはね熨斗 (存疑)

四山の銘

物ひとつ瓢はかるき我世かな

八十三丁裏

○誤を伝ふくさくさ

色々の名も紛はし春の草 珎硯

ひさご集に出て翁の脇あり

さぞな都浄瑠璃小唄爰の春 素堂 桃青三百韻の一つ也

足駄はく僧も見へたり花の雨 杜国 笈の小文に上たり

渺々と尻ならべたる田植かな 鬼貫

泊船集に笈日記に、渺々と尻ならべたる田植

哉といふ句を入られたれとは伊丹が句也と

いへる。

野の宮の鳥居に蔦もなかりけり 涼菟

船となり帆となる風のはせを哉 一晶

○此句は泊船集に云、翁の俳なしとある人の申されしが

実否知らずとなり。

終夜秋風聞やうらの山 曾良 おくのほそ道

そのかみは谷池なりけらし小夜砧 公羽

右八句句撰に誤りて翁の句とす。

布子着て夏より暑し桃の花 支考

深川やはせをを富士に預行 千里 野ざらし紀行

八十四丁面

近付て成てわかるゝ案山子哉 惟然

秋の暮男は泣ぬものなればこそ 旧徳

落水折目のまゝの頭巾かな 普船

右五句拾遺に誤り翁の句とす

つかみあふ子供のたけや麦畑

嵯峨日記に去來の句。去來抄に游刀の句とす。

梅が香や通り過れば弓の音 毛

右二つ新巻に誤りて翁の句とす

雪毎に梁たわむ住居哉 岱水 句集元禄五年 古撰

泊船 句撰みな翁の句とす。附合集に路通脇、

翁第三也。

八十四丁裏

追加 一葉集

寛文・延宝・天和年中

月の鏡小春に見るや目の正月

ゆく雲や犬の逃ほへ村時雨

火吹竹音やしぐれて小豆食 (存疑)

むら時雨てれふれ町の名なるべし (存疑)

石かれて水しぼめるや冬もなし

小野炭や手習ふ人の灰せゝり

塩にしてもいさことゝつてむ都鳥

歌仙あり雑句なるべし

竜安寺にて

山鳥よ我もかもねん宵まとひ

雑句にや

霜かれに咲は辛気な花野かな

イにの

八十五丁表

浪の花と雪もや水にかへり花

けさの雪根深を園の葉かな

時雨をやもどかしがりて松の雪

あられする帷子雪は小紋かな

黒森を何といふとも今朝の雪

子におくれたる人の許にとて

しほれふすや世は逆さまの雪の竹

笠の緒や喉喰しむる不二の雪 (存疑)

雪花は南の枝や遅さくら (誤伝)

みちのく名所

山は猫眠りていくや雪のひま

雪の日や羅紗の羽織にたゝき鞘

八十五丁裏

千代をふる天のてんつるあられ酒 (誤伝)

李下の妻の悼

被き伏蒲団や寒き夜や凄き

元起和尚より酒を贈りけるかへしに奉りける。

水寒く寝入かねたるかもめかな

初霜や菊冷初る腰の綿

湖水から光り出しけり比良の雪

一により 第三迄あり

石山の石にたはしる霰かな

夜すがらや竹氷らするけさのしも

かりてねむ案山子の袖や夜半の霜

五百丸へ元服の祝として

八十六丁表

春や立また春を見む此師走

○ 考証

我為に日はうらゝ也冬の空

深草や是も浅草火鉢かな (存疑)

餅花やかさしにさせるよめが君

大年の夜ぬすみにあひて

梅干にかよふ鶯あはれなり (存疑)

九のとせの春秋市中に住わびて、居を深川の辺りに移

す。長安はこれ名利の地、空手にして金なきものは行路かたし

といひけん人のかしこく覚侍るは此身のともしき故にや。

八十六丁裏

柴の戸に茶を木葉かく嵐かな

消息に

三十里尾張大根のはなしかな

此消息に此句と落葉してぬかみそ桶なかりけり云句と並びてあり。先方宛名に申しされども後正の為消息の

部に出でたり。

画賛

たのむそよを寝酒なき夜の紙襖

(存疑)

けし炭に薪わる童が小野の奥

庵にうつりて

深川や根こしの芭蕉雪かこひ

頭巾着た貌さしこむや縄すだれ

(存疑)

ふたゝび芭蕉庵を造りいとなみて

あられ聞や此身はもとの古柏

八十七丁表

辛崎夜雨

琵琶の湖も雨よ疎顔が松の律

(存疑)

粟津青嵐

さそ野人の淡たつ市の声 (存疑)

矢橋帰帆

夕かすみ明石の浦を帆のおもて (存疑)

比良暮雪

さそへ雲白衣の天狗比良の雪 (存疑)

石山秋月

汐やかぬ須磨よ此湖秋の月

瀬田の夕照

遅き日にかわかぬ網の左袖

八十七丁裏

三井晚鐘

盃に片われはなし花の鐘

堅部落雁

鳥の文かたゝの雁よ片便

右八景は宗房の時の吟なりと云